The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	コートジボワールで長期休暇中に技能を身につける子どもたち ： 学校に通わせ続けることは正しい開発目標なのだろうか？
Author(s)	澤村, 信英
Citation	未来共創. 2024, 11, p. 248-252
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/97820
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

エッセイ

コートジボワールで長期休暇中に技能を身につける子どもたち

学校に通わせ続けることは正しい開発目標なのだろうか？

澤村 信英

コートジボワール共和国は、1960年にフランスから独立した西アフリカ、ギニア湾に面する国家である。日本では象牙海岸共和国と称されていたこともあった。フランスの植民地であったこの国に暮らす子どもたちは、学齢期になると生活言語とは異なるフランス語を使って勉強を始めることになる。教授言語がフランス語であるので、それが十分に理解できなければ算数や理科も勉強のしようがない。教育制度は、ほぼフランスのものにならっており、小学校（6年間）および中学校（4年間）が義務教育で、新学期は9月半ばに始まり、6月中旬から約3か月間が長期休暇になる。

今回、指導学生（小松勇輝）のフィールド調査に同行し、2023年8月1日から10日まで、コートジボワールの首都アビジャンに隣接する地方都市に行く機会を得た。ちょうど長期休暇の期間であったが、多くの学校で休暇中の補習である「バカンス・コース（Cours de Vacances）」を実施する張り紙が見られた。我々の訪問した学校では、参加する子どもは実施される学校の児童では必ずしもなく、担当する教師もまた、別の学校の教師であった（写真1）。さらに、受講料は400 ～ 600円程度であり（1か月程度の実施期間）、さほど高額ではない。このような組織化された休暇中の補習は、私がフィールドとしている英語圏のケニアではまずみられない。

補習は午前中だけであるので、昼食後に街中を歩いていると、小

大阪大学大学院人間科学研究科グローバル共生学講座；sawamura@hus.osaka-u.ac.jp

写真1　小学校で補習コースに参加する子どもたち

松の名前を呼びながら少年（以下、アリと仮称する）が駆け寄ってきた。アリ（14歳）は、先の学校で2021年11月に調査した時、5年生のクラスの児童だったという。補習には参加していなかったが、我々が通りかかったバイク修理店で見習い（徒弟）として働いていた。そのような偶然から、それから数日の間、午後の2～3時間をその店先に腰を据え、修理などをする様子を観察させてもらった（写真2）。親方は我々には優しく接してくれるが、徒弟（2～3人）に対しては厳しかった。親方が店にいない間は皆にこやかであるが、親方が戻ってくると一挙に緊張感が高まり、顔色が変わった。最も驚いたのは、親方がバイクの修理を始めるや否や、徒弟らはバイクの周りに集まり修理状況を凝視しながら、親方の指示がある前に必要な工具をいち早く探し出し、親方に渡していたことである。親方にとっては、なくてはならない助手である。

昼食は提供されているようであったが、これだけ役立っている

写真2　バイク修理店で技能を身につける子どもたち

ので多少の賃金を受け取っているかもしれないと思った。ところが、小松の調査によれば、逆に2000円程度を親方に支払って、長期休暇中、面倒を見てもらうのだという。この金額は、学校で補習を受ける額の数倍に相当する。それにもかかわらず、長期休暇中、学校ではなく仕事場を選んで行かせる保護者がいるのである。児童労働などではなく、技能を習得する訓練の場として利用されており、伝統的にこのような徒弟制度が存在することは多い。

確かに、まだ基礎教育の就学年齢にある子どもが、このような形で早期に技能を身につけようとすることには賛成できない面もあるかもしれない。後で小松から聞いた話としては、親方による暴力もあるようで、アリは我々が訪問した初日に見かけただけで、2日目以降には現れなかった。しかし、そのアリは保護者（叔父：両親は離婚し、父親は海外に出稼ぎしている）と相談し、職業訓練を受けることはあきらめず、別のタイヤ修理店で元気に働いていたという。

このエッセイを書きたいと思った動機は、このようなそれぞれの子どもたちの置かれている状況と国際社会が目標として定めるゴールとの間には、ギャップがあるように思えたからである。今では広く知られるようになったSDGs（持続可能な開発目標）であるが、その対象が途上国に限定されることなく、先進国も達成すべき共通の目標として設定された。そのため、SDGsから開発の側面が弱められ、特にアフリカ諸国にとっては目標としてそぐわない面がある。

SDGsのゴール4は「すべての人に包摂的かつ公正で質の高い教育を確保し、生涯学習の機会を促進する」である。この教育の開発目標は、学校教育だけを推進するものではないように見えるが、この下位にあるターゲットの第1は「2030年までに、すべての子どもが男女の区別なく、適切かつ効果的な学習成果をもたらす、無償かつ公正で質の高い初等教育および中等教育を修了できるようにする」となっている。明らかに、少しでも長く学校へ就学させることが善であると捉えられている。このことは、MDGs（ミレニアム開発目標：2015年を目標達成年とされ、現在のSDGsはMDGsの後継である）においては、初等教育だけが普遍化の対象とされていたことからもわかる。

話をもとに戻すと、アリの学校での成績は良くなかったようである。本来、コートジボワールでは中学校までの10年間が義務教育である。同国は、フランスと同様に自動進級ではなく原級留置（留年）が行われる。彼も、留年が決まっていたようである。成績が悪いと、学校という場では一般に歓迎されない。それどころか、彼の場合、友達に暴力をふるい、いわゆる問題児と認識されていた。中学校へ進学し、卒業できたとしても、その学歴をもって雇用される可能性はほぼない。彼にとっては、早期に技能を身につけて、自活していく以外に生きていく道がないと言ってもいいかもしれない。

あまり注目されることはないが、SDGsゴール4のターゲット4には「2030年までに、技術的・職業的スキルなど、雇用、ディーセントワーク（働きがいのある人間的な仕事）および起業に必要な技能を備えた

若者と成人の割合を大幅に増加させる」とある。これは、中等教育修了後に職業教育を受けることを想定しているが（ターゲット3）、コートジボワールをはじめとする多くのアフリカ諸国において、このような段階を踏んで技能を習得することは、ターゲット1にある「適切かつ効果的な学習成果をもたらす」という必要条件に合致しないように思える。

このようなことを考えるとき、アリやその保護者が選択した長期休暇中に学校ではなく職業訓練を受けるという選択は、理にかなっているように思える。SDGsは理念としては崇高であるが、日本を含む先進国や経済状況が異なる国々をまとめての目標設定には無理がある。教育歴が十分ではなくても、身につけた技能と信用をもとに、生き生きと働いている人々に出会うことは多い。10年後にアリがいかなる成長を遂げているのか、できることなら見届けてみたいものである。